

武庫川女子大学 武庫川女子大学短期大学部

第2号

FDニュース



● 目 次 ●

- [1] 学科FDの取組み
心理・社会福祉学科、人間関係学科
英語文化学科、英語コミュニケーション学科
- [2] FD推進委員会の活動報告
- [3] 私のティーチングティップス
- [4] FD豆知識
- [5] 「私語に関する学生アンケート調査」からより良い授業を考える！
- [6] 大学院の振興・充実に関する検討委員会より
- [7] 武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会規程制定
- [8] 編集後記

学科FDの取組み

心理・社会福祉学科 学科長 安藤 明人
人間関係学科

「大学教員は無免許で無気力運転するドライバーのようだ」という声を、以前はよく耳にした。曰く「教員免許がなくて教えられるのは大学だけだ。それに、十年一日のごとく大昔に作ったノートを読んで授業を済ますことができるのも大学だけだ」。「以前の」大学教員なら、「大学教員の第一義的使命は教育ではなく研究だ」とうそぶいて、開き直ることができた。しかし、そんな「古き良き時代」は遠い過去のものとなってしまったことを、私たち大学教員は今、痛切に感じている。糸魚川先生が学長に就任され、「今、われわれ教員の取り組むべきは授業改善・授業改革である」と、大学全教員に対して日常的な授業の再点検を指示されたことは、日々の授業に悩みストレスを抱え鬱々としていた教員にとって、勇気をもって授業改革に向けての一步を踏み出すきっかけとなった。



平成20年度からFD推進委員会を中心に組織化されたFD活動は、私たち教員に大きな刺激を与えた。他学科の異なる学問領域の先生の授業改善への取り組みや工夫を聞くことのできる大学授業研究会は、自分の授業を振り返る良い機会となった。特に第4回の大学授業研究会（平成20年11月12日実施）では、私どもの学科の小花和 W. 尚子先生が「心理学英語文献講読Ⅰ」の実践報告を行い、参加の先生方からさまざまな質問やご意見を頂戴できたことは、この授業の共同担当者として、本当にありがたかったし勉強にもなった。その時、なにか「よーし」と力がみなぎってくるのを感じたのを覚えている。このときだった。このような会を学科でも開こうと思いついたのは。

さっそく、学科のFD推進委員である長岡雅美先生に相談し、先生の全面的なリーダーシップのもと、学科FD研究会を新たに立ち上げることができた。平成21年度は、6月の第1回（話題提供：長岡雅美先生、玉木健弘先生）を皮切りに、7月（松村憲一先生）、9月（井上雅勝先生）、11月（茅野宏明先生）と、計4回の研究会を開催した。研究会では、メンバーが学科の同僚ということもあって、談論風発、成功例だけではなく失敗例やオフレコ情報も飛び出す打ち解けた会になっている。

気がつけば在職25年の古参教員になってしまった私だが、若手の先生が中心となって授業改善に取り組む姿をみると、老兵も負けてはいられないという気持ちにさせられる。そして大学教育や大学の授業に対する大学教員の熱意のなさを指摘する声に出会ったら、今なら自信をもってこう言うことができる。「武庫川は違います。一度武庫川にいらしてください」と。

学科 FD の取り組み

英語文化学科

英語コミュニケーション学科

幹事教授 安達 一美

—コーディネータ制の導入および MFWI との連携—

一つひとつの授業を充実させる工夫は各教員が最善を尽くしています。しかし、科目間の連携や同一科目での教員間の連携は、時として教員個人の努力だけでは十分ではないことがあります。そこで、異なる科目間の連携や同一科目内での教育内容の統一を図ることによって一人ひとりの教員では成しえなかった教育効果を引き出すことを目的に、英語文化学科および英語コミュニケーション学科では、2007年度からコーディネータ制を導入し、2008年度から具体的実施に入っております。

7分野（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング、英文法、英語の発音、TOEIC）において、各分野に専任教員1名がコーディネータとしてたち、すべての分野を統括するコーディネータ委員会が組織されています。コーディネータ委員会では、効果的な授業展開や各分野との連携の深化のために、統一されたシラバスと教科書、評価のあり方、授業運営の仕方などを検討しています。その委員会での検討内容は、学科会議の承認を経て、各分野の科目担当者によって実施されます。科目担当者は実施にあたっての問題点や改善点を各分野のコーディネータに報告し、コーディネータ委員会で更なる検討が加えられ改善をしていきます。

また、英語文化学科では2年次前期に、英語コミュニケーション学科では1年次後期に、各1学期間、アメリカ分校の Mukogawa Fort Wright Institute (MFWI) にて English Only のカリキュラムが設定されています。当然のことながら MFWI の教員との連携も重要なものとなります。MFWI へ学生を引率していく教員は MFWI で西宮キャンパスの教育状況の説明と意見交換をし、さらに MFWI で授業参観の上、帰国後に英文学科にフィードバックをすることになっています。また、年1回、両キャンパスの教員の交流を通して意見交換をしています。今年度は1月に MFWI より3名の教員を約1週間西宮キャンパスに招聘し、次年度から新たに導入される「ACE (Advanced Course in English) プログラム」と学生の学習履歴や教員の指導履歴を集中管理する「カードシステム」について、両キャンパスでの進捗状況の確認や今後の課題の検討をして協力体制を強化しました。各教員の力を有機的に繋ぐコーディネータ制と MFWI との連携によってより効果的に学生の学力向上を図ります。



FD 推進委員会の活動報告



1 「大学授業研究会」実施報告（第2回～第4回）

第2回から第4回までの大学授業研究会にも、予想を超える多くの参加者を迎えることができ、「私語のない双方向授業」の重要性を共有しながら、回を重ねるごとに内容的にも充実した研究会となった。

第2回大学授業研究会の司会は、情報メディア学科の赤岡仁之委員が行い、日本語日本文学科の西山明美先生が書道授業において日本で初めての電子教材 e-Learning を活用した事例を紹介され、情報メディア学科の福井哲夫先生がマルチメディア教材の利用などについて発表。心理・社会福祉学科の井上雅勝先生は、独自に実施された学生アンケートに基づく私語要因の分析と今後の対策方針について報告された。学生の心理的傾向からの分析に、授業改善への新たな視点が提示され、多くの質問や意見が会場から寄せられた。

次の第3回目の司会は音楽学部の今城道子委員が担当。音楽学部の永島茜先生が授業で学生を必ず名前と呼ぶなど



第2回 左から井上先生、福井先生、西山先生

紹介。また薬学部の黒田幸弘先生は、学生の苦手科目を大教室で担当する際に工夫しているポイントを解説された。続く建築学科の杉浦徳利先生は、建築学科で実践している1対1の対話形式の授業を紹介し、工夫を凝らしたさまざまな取り組みに会場から多くの関心が寄せられた。

昨年度の「授業実践事例報告会」から引き継がれた「大学授業研究会」には平成21年度の公開授業を含めると約400名の教職員にご参加いただいた。学生のモチベーションを高める工夫、わかりやすい授業にするための工夫、学生への問いかけの工夫など、様々な実施例が紹介され、参加された教職員から多くの質問や意見があり活発な討議が行われた。「より良い授業」

を実施するために、何年も何十年も試行錯誤を繰り返し、悩み、工夫し、改良を重ねてきた教員の授業に対する情熱と努力の結晶が、武庫川女子大学で誕生し歩みだした「大学授業研究会」を大きく成長させた。今後も具体的な問題を教職員と学生全員が力を合わせて検討し改善していくことができれば、授業だけではなく、もっと広い意味での「教育力」においても日本一を目指せると思う。

(FD推進委員 松井徳光)

2 その他の活動状況



平成21年度FD推進委員会は、10回の会議を開催し、教育改革推進委員会より諮問された成績公開の是非に関する答申、大学授業研究会の開催および報告集の編集、FDニュースの発行などを審議検討した。第10回FD推進委員会では、糸魚川学長に本学FD活動への思いと期待を語っていただき、次年度の委員会活動への方向性を確認しあった。

平成21年9月には、従来のホームページをリニューアルし、学外からもアクセスできるよう改善した。また、FD推進委員会の活動も2年目となったことから、紙面でお届けするFD情報として「FDニュース」を年2回発行した。現在は学内の教職員対象としているが、今後は、学生や保護者への配布も行う予定である。

〈お知らせ〉

「大学授業研究会」の2年間にわたる授業実践事例報告会の成果は、今後の授業改善に活用いただけるよう編集し、1冊の報告集として発行することとなりました。平成22年度前期中には、お届けできる予定ですので、「より良い授業づくり」にお役立てください。

学生と教員との親近感を創出する例を紹介され、健康・スポーツ科学科の松本裕史先生は自身の目指す「活気ある授業」を行う上で欠かせない教員と学生との人間関係の重要性を説明。食物栄養学科の林宏一先生は、グループワーク中心の授業での実践例を報告された。非常に興味深い発表内容に、「実際に授業風景を見てみたい!」という声も聞かれた。

そして、本年度最後の第4回大学授業研究会では、建築学科の大井史江委員が司会をし、教育学科の北口勝也先生が、専門である応用行動分析学に基づいて強化因子を巧みに利用した指導方法について



第4回 左から杉浦先生、黒田先生、北口先生

「私のティーチングティップス」

薬学部薬学科教授 中林 利克

武庫川学院に奉職して25年が経過しようとしています。現在の私の授業方法はこの間の経験に基づいて行われています。その一端をご紹介します。

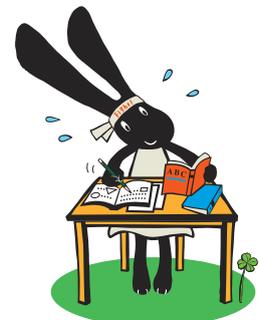
授業の開始・終了時には必ず挨拶をします。立たない学生がいる場合は、注意をして全員起立するまで待ちます。これで学生に、これから授業が始まるという緊張感を、最後の挨拶ではこれで授業が終わったという安堵感を持たせ、気持ちの切り替えを行わせます。第1回の授業では、この科目を学習する目的、到達目標、他の科目との関係などを説明し理解させます。赴任当時、学生より語尾がはっきりしない先生の授業は理解し難いとの話を聞いていたので、理解しやすく説明するように心がけています。そのためには、関連領域を含めての十分な予習とノート作りが必要と考えています。

授業ではパワーポイントで作成した教材を教材提示装置でスクリーンに映し出すと同時に同じ教材をプリントして配布し講義を進めていきます。ただし、プリントにはすべて記入しておらず、重要語句や構造式の一部が省略してあります。理由は、薬剤師は調剤時に処方せんを短時間で読み誤りがないかチェックする能力が必要となります。学生からはカッコを付けて見つけやすくして欲しいとの要望がありますが、短時間で短い文章を読み問題点を見つけ出す練習として活用するように説明し理解させています。

授業中は講義を進めながら学生の表情を観察します。内容が分からない場合は、学生同士が小声で会話を始めます。この場合は、学生同士で現在までの授業内容で理解できない点を話し合う時間を授業時間中に数回取ります。その間、歩き回り質問を受け付けます。アンケートによれば、この話し合う時間を持つことに関しては高い評価を受けています。

定期試験の得点が低く再試験該当となった学生に対しては、再試験の日程が決定したあと info@MUSES 等で連絡して授業を行います。誤りの多い例をパワーポイントで作成し、誤解している点について解説すると、再試験の成績が向上することが判明しました。

以上、参考になれば幸いです。



Lavy
© Mukogawa Women's University

FD 豆知識

シラバスとは

シラバス (syllabus) の語源は、ギリシャ語の sittuba とされ、「羊皮紙、文書の内容、目次」を意味する。その訳語には「授業計画」や「講義要項」など諸説があるが、大学ではそれらを用いず「シラバス」を用いることが多い。シラバスとは、「教員が、授業の初め、あるいはそれ以前に学生に対して配布する授業計画」のことである。教員は、シラバスに、授業の目的・目標、各回ごとの授業のテーマ、そのために予習しておくべき事柄、課題、評価の方法と基準などを明記する必要がある。一方、学生は、シラバスを読み、その内容に合意した上で授業に出席することが求められる。しかしながら記載された内容を固定的に捉えるのではなく、学生と教員との双方向の授業展開を行う上で、履修者の学習理解度に応じて、その計画を修正してゆくことも考慮すべきことである。

シラバスが提示されることによって、学生にとっては各授業の具体的内容や評価の基準を知ることになるので、授業を履修するときの予習や復習あるいは課題に取り組むための前提となるヒントや基礎情報を得られる。さらに教員にとっては、関連科目の内容を知ることによって、自らの担当する授業内容が教育課程の構造上どこに位置するかを把握でき、科目間の繋がりを構築するための情報交換の機会にもなりうる。つまりシラバスを活用することによって、学生と教員の双方向による授業改善の前提条件が成り立つのである。

〈参考文献〉喜多村和之 (1993) 『大学評価とは何か—自己点検・評価と基準認定—』 東信堂

大学セミナー・ハウス (1999) 『大学力を創る：FDハンドブック』 東信堂

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001) 『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集』 玉川大学出版部。

(FD 推進委員 西本 望、西尾亜希子)

「私語に関する学生アンケート調査」からより良い授業を考える！

平成21年度、教務部では「私語とたたかおう！」キャンペーンの一環として、7月にアンケート調査を実施した。アンケートは私語を中心とした10項目で、配布9,638人に対して7,413人の回答があり、回答率は76.9%であった。FD推進委員会としては、学生からの回答は、「より良い授業研究」を展開していく上で、学生が私語についてどのように考えているか、何が私語をする原因になっているのか等を知る上で貴重な情報と考えグラフ化した。

図1では、「授業中の受講態度について、他の受講生のことで気になることはありますか？」という質問で、圧倒的な高い比率で「私語」が一番であった。このことより、私語は多くの学生から好ましく思われていないことが明らかである。

では、私語をすることは良いか？に対しては、図2に示したように8割以上の学生は良くないと思っている。

また、私語の原因として図3に示すように「授業が面白くないから」がトップで「私語が楽しいから」、「授業がわからないから」などが上位にある。このことから、私語と授業内容とは関連性が高く、双方向の授業が重要であることは明らかである。

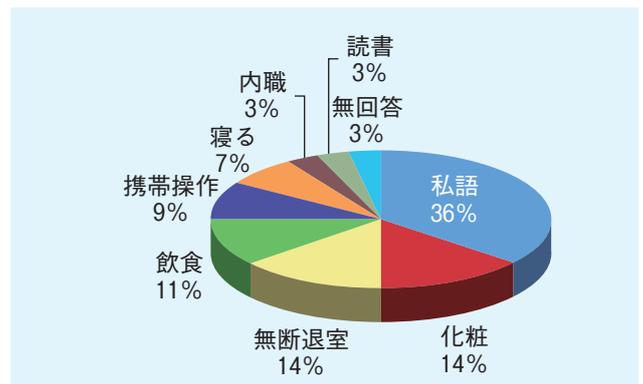


図1 授業中の受講態度について、他の受講生のことで気になることはありますか？

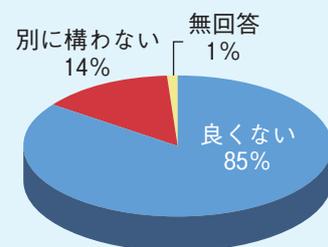


図2 授業中、私語をすることは良いと思いますか？

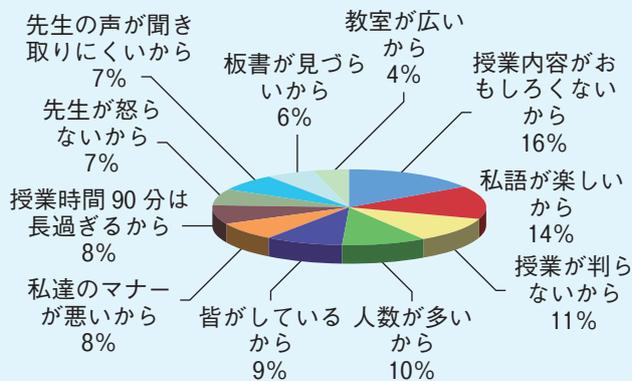


図3 私語の原因は何だと思えますか？ (複数回答可)

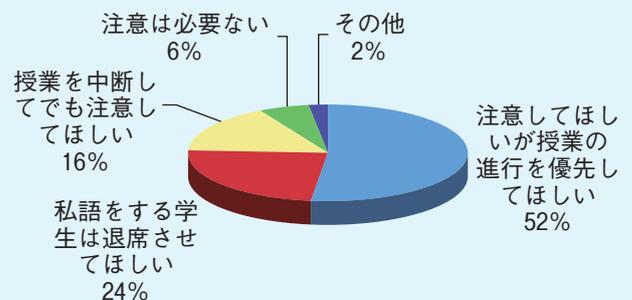


図4 授業中、私語が多い時、先生にどう対処してほしいと思えますか？

では、「私語が多い時、先生にどう対処してほしいと思えますか？」については、図4に示しているように「注意してほしいが授業の進行を優先してほしい」が圧倒的に高く、厳しい声として「私語をする学生は退席させてほしい」や「授業を中断してでも注意してほしい」などが上位の回答であった。このことから、学生は教員に対して、私語には厳しい態度で注意してほしいと望んでいることが判った。

「私語の原因」として学生が第1位に挙げている「授業が面白くないから」というのは、授業に対する非難のみではなく、藁をも掴むような気持ちから出た悲痛な叫び声なのかもしれない。従って、われわれ教員は、学生の意欲を喚起できる「私語のない双方向授業のあり方」を展開していくことが重要である。

(FD推進委員 高橋享子、黒田幸弘)

III 大学院の振興・充実に関する検討委員会より 委員長 友田 泰正

本委員会は、常任理事会において大学院の更なる振興・充実を図る必要があるとの方針を受け、平成21年4月に組織されました。メンバーは、研究科長、大学院委員、専攻の基礎となる学科長、教務部・入試センター・キャリアセンター・法人室・経理部および広報室の長で構成されています。

これまで毎月1回会議を開催し、大学基準協会の評価結果のうち、大学院に関する改善改革案の検討を行ってきました。具体的には、定員充足率の向上、学位授与基準（①学位論文の提出資格、②論文審査の要件、③論文審査の手順、④論文審査の審査項目）の明示、博士後期課程の単位取得満期退学者の学位授与等についてであり、大学院として統一的な方針の策定に取り組んでいます。

「武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会規程」が制定されました

平成22年4月1日より、武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会規程が制定されました。以下に、主な条文を抜粋しています。

第1条 武庫川女子大学短期大学部の教育理念及び学科等の教育目標の実現を目指し、社会に役立つ有為な人材を育成するために、教員の主体的・恒常的に行う授業の内容及び方法の改善・向上に資することを主たる目的とし、大学全体で組織的に教育水準の質的向上を推進するため、学長の下に、武庫川女子大学短期大学部FD推進委員（以下「委員会」という。）を設置する。

（構成）

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- | | | |
|------------------------------------|-----|-----|
| (1) 各学科から推薦された委員 | 各1名 | 計7名 |
| (2) 共通教育科から推薦された委員 | | 1名 |
| (3) 教務部長 | | |
| (4) 学長が委嘱する委員 | | 若干名 |
| 2 委員長及び副委員長を置く。委員長及び副委員長は、学長が指名する。 | | |
| 3 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。 | | |

（審議事項）

第3条 委員会は、第1条の目的を達成するため、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 授業改善のための基本方針の策定に関する事項
- (2) 教員の研修会及び講習会の開催に関する事項
- (3) 教員の教授法及び教授活動の相互研鑽に関する事項
- (4) FD活動に関する情報の収集と提供に関する事項
- (5) 各学科の教員へのFD活動の啓発に関する事項
- (6) 教員の教授活動の支援に関する事項
- (7) その他、学長の諮問する事項及び委員会が必要と認めた事項

附則

この規程は、平成22年4月1日から施行する。



編集後記

「私語に関する学生アンケート」から、学生が思う良い授業とは、「面白い」「わかりやすい」「私語のない」授業のようです。平成21年度、大学授業研究会をはじめとする活動において検討された授業改善のための具体的工夫とその成果は、「私語のない双方向授業」への方向性を提供してくれたように思います。

第2号からは、新シリーズ「学科FDの取り組み」「私のティーチングティップス」「FD豆知識」が加わりました。『FDニュース』では、これからも教職員の方々にさまざまな切り口で情報提供を行い、授業の更なる改善に向けて幅広く意見を交換する場にしたいと考えています。

【FDニュース編集委員会】

高橋享子、西本 望、長岡雅美、黒田幸弘、西尾亜希子、私市佐代美（編集委員 MN）

